

山行同志示

草場佩川

路は羊腸入る石苔滑かなり

風鞋底より雲を掃廻る

山に登るは恰も書生の業に似

一步步高うして光景開く

【作者】草場 佩川（一七八七〜一八六七年）（天明七年〜慶応三年）佐賀藩の儒官、名を「い」※（あきら）、字を棟芳（ていほう）、佩川

はその号。天明七年肥前国多久（たく）に生まれる。若くして江戸に出て古賀精里（こがせいり）に学び、学成り帰郷して儒官となる。菅茶山、篠崎小竹、頼山陽等と交わる。多種多芸にして武芸はもとより和歌、篆刻（てんこく）、雅楽、南画等にも長じていたという。詩は多作にして二万首にも及び慶応三年没す。従四位を追贈される。

【語釈】\*羊 腸：羊の腸（はらわた）のように山路（やまみち）の曲がりくねって険しいこと

\*鞋 底：足もと \*光 景：けしき

【通釈】山路はくねくねと曲がり、苔の生えた石はなめらかで、風は足もとから雲をはらって吹きめぐる。さて、山に登るのはちやうど

書生の学問修業と同じで、一步一步高いところに登るにつれて、新しい視界が開けてくるのである。

【備考】この詩は、登山を勉学にたとえて門人を戒めたものである。詩の構造は仄起こり七言絶句の形であって、上平声十灰「かい」韻の苔、廻、開の字が使われている。